

伝承されてきた「漢方薬」を西洋医学にうまく取り入れる動きが広がってきた。抗がん剤の副作用や高齢者医療などに効果的に使わうと、国の実行計画や研究の提言が後押しする。さらに、高齢化が進む日本で過剰な服薬と医療費を抑えようと、漢方の新たな活用法も模索が始まっている。

都内に住む70代の男性は、消化管の壁にがんができて手術で摘出した。その後、腹部に移し、抗がん剤治療を受けることになった。だが、体のだるさや下半身の冷えがひどく、「薬を飲み続けられない」と患者は頭を抱えた。主治医の紹介で、がん研有明病院（東京・江東）の漢方サポート科に行くことになった。

効果をテータ解析
同病棟の星野恵津夫部長は、患者に下半身の冷えに効果がある「牛車腎気丸」など4種類の漢方薬を処方した。副作用は徐々に和らぎ、抗がん剤治療を続けられるようになった。

同病院は2006年4月



患者の肌を診る大阪大病院の秋原圭祐
・漢方内科診療科長（大阪府吹田市）

副作用和らげ減薬に

る。どの漢方薬を使うかは、副作用の症状や検査結果から決めるが、星野部長もこうしてその漢方が効果あるのか、分らない点があるという。このため、これまでに漢方薬を処方した約2900人分のデータを解析を行い、「漢方薬を処方する際の根拠を明確にしたい」と意気込む。

まってきた。厚生労働省が15年12月に公表した「がん対策加速化プラン」では、がん患者の副作用や後遺症の軽減を目的に、研究推進が明記された。

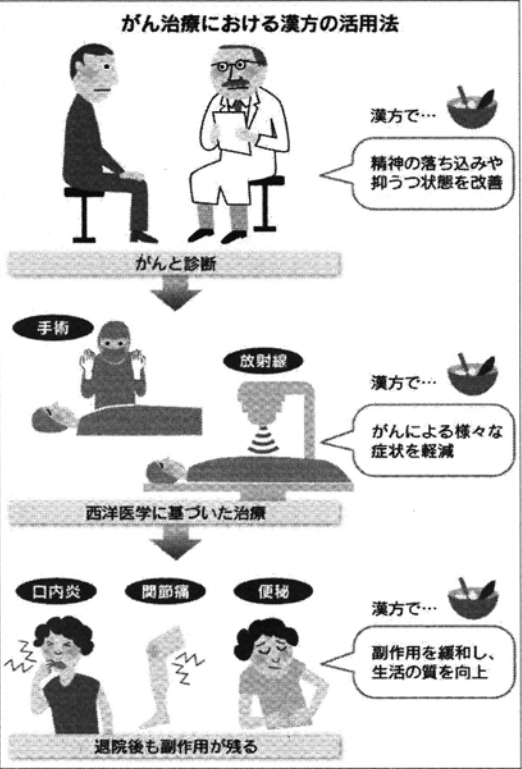
伝えていくことが明記された。提言書では、高齢者医療で漢方が役立つことを強調。中でも、加齢とともに運動機能や認知機能が低下する「フレイル」の予防に有効活用する方針を打ち出した。

漢方薬、がん治療に活用

漢方で…
精神の落ち込みや抑うつ状態を改善

漢方で…
がんによる様々な症状を軽減

漢方で…
副作用を緩和し、生活の質を向上



高齢者医療でも効果期待

く低下していた。休まず歩けるのは数百メートル、片足で立つこともできない。そこで、体力や気力を高める効果もある牛車腎気丸を処方したところ、握力は10%以上、歩ける距離は2〜3倍に回復した。

か、専門医以外も安否治療を行うよう促している。コスト抑制も検証

秋原氏は「漢方の本質は生体の持つ回復力を引き出すこと」と説明する。患者の状態をより的確に処方すれば、一つの漢方薬で複数の症状を改善することもあり、ポリファーマシー（多剤併用）からの脱却につながる。

一方、高齢化に伴って増え続ける医療費の抑制に漢方を役立てられないか、こうした視点で立派な新たな研究も始まっている。

ただ、そのためには正しい知識に基づいた処方が必要不可欠だ。日本老年医学会は15年、「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015」をまとめ、科学的根拠に基づいた高齢者の漢方治療を初めて盛り込んだ。高齢者への処方が増えるな

北副理事長は「医療費の観点からも、漢方が有効かどうか明らかにしていく必要がある」と話している。（辻征歌、馬越ゆかり）

文部科学省が2001年3月に策定した医学教育の指針「医学教育モデル・コア・カリキュラム」に全ての医学者が卒業までに「和漢薬（漢方薬）を概説できる」が盛り込まれた。これをきっかけに、漢方医学教育が全国的に広まった。

全医科大で講義 専門家の指導少なく

現在では全ての医科系大学で漢方に関する講義が行われている。ただ大学教育レベルの差は大きいとみられる。漢方医学の専門家が教えるケースはまだ少ない（秋原氏）という。

昨年12月には一般社団法人「日本漢方医学教育振興財団」が設立。専門的人材の育成などを目的に本格的な活動を始めている。